

**資源環境経済学特別演習Ⅱ 議事録**  
**2012年度 第10回**

<b>報告題名：ナマコを事例とした資源の自主管理の持続性</b>			
<b>報告者</b>	<b>滝田 雄基</b>	<b>日時</b>	<b>12月13日 午後3時～</b>
<b>所属分野</b>	<b>国際開発学分野</b>	<b>場所</b>	<b>第二講義室</b>
<b>座長</b>		<b>議事録担当者</b>	<b>中村 彰宏</b>
<b>出席者</b>			
長谷部、小山田、米澤、米倉、冬木、高篠、伊藤、鈴木、スチン、水木、安部、 タンボウニ、中村、山口、泉井、黄、今井、渋谷、畠山、ナスムンク、徐、趙、Manalo、劉、王、キエイ、井上、志賀、金、伊藤（良）、伊藤（航）			
<b>報告要旨</b>			
<p>近年、世界的な需要の増加やそれに伴う漁獲量の増加によって、海洋資源の枯渇が問題となってきている。枯渇の起こりやすい資源の一つとして、中国市場において世界的に輸入されている『ナマコ』が挙げられる。日本においても、特に北海道・青森県のナマコは高級品として取引されている。しかし、この地域では漁協主体による資源管理を行った結果、資源が枯渇という事態には陥らなかった。卒論においては、資源管理の現状についてまとめ、日本では上手くいっているとしたが、本研究ではその資源管理がどのように有効に働き、持続して行けるのかを明らかにすることを目的とする。</p> <p>対象とする地域として特に輸出規模、金額が多い北海道・青森県に注目し、9月末～10月頭に現地聞き取り調査へ行った。今回はその調査のまとめと今後の展開について報告する。</p>			

## 質疑・応答

**西田**：資源管理を行うことによる所得の増加について分析されているとのことですが、今のところ、所得が増加するという結果が出るという見込みはありますか。

**滝田**：目先の利益という意味では見込めないかもしれないが、長期的には増加が見込めるのではないかと考えています。

**西田**：どのようなデータを使用するのですか。

**滝田**：漁協からいただいていた、漁獲量と金額のデータを使います。

**井坂**：日本のナマコ資源管理が有効であるという前提で調査しているようだが、有効であるということの根拠は、今現在資源の枯渇が起こっていないということか。今の時点で枯渇が起こっていないということから、将来的にも枯渇が生じないと見込んでいるのか。

**滝田**：そう考えています。

**井坂**：資源管理の主体が漁協のようだが、漁業の場合では資源管理の主体が漁協であることが一般的なのか。農地の場合で考えると、私的財としての性格が強いという影響があるのかもしれないが、農協が資源管理の主体にはなっていないように思う。なぜ漁業の場合は資源管理の主体が漁協となるのか。

**滝田**：漁協が漁業権を持っており、まとめ役となっているため。

**井坂**：実際の主体は、漁業者とは言えないか。

**滝田**：実際に資源管理を行うのは漁業者だが、管理の規定等を作り、漁業者をまとめているのが漁協であるため、漁協が管理の主体と言える。

**井坂**：資源管理の実施条件は何を指しているのか。既存研究にあるように、漁業者間の合意を得ることと、漁業所得の増加の両方なのか。

**滝田**：両方です。どちらかが駄目ではいけないと考えています。

**井坂**：漁獲量の上限等の規定が、合意形成と所得増加の前提となっているのか。

**滝田**：規定が守られているということが重要。

**渥美**：資源管理はいつから行われていて、なぜ始められるようになったのか。

**滝田**：新生マリンでは、漁業者の一人が熱心なリーダーとして平成 18 年から始められた。その後、試験場や大学の協力のもと、iPad が導入されるようになった。宗谷では、昭和 63 年に当時の漁業組合長が石川の種苗放流を視察に行き、宗谷でも始められるようになった。川内町では、漁業者の知り合いである陸奥市役所の職員が台湾のナマコ市場の視察に行った時の話がきっかけとなり、資源管理が始められるようになった。

**長谷部**：自主管理の自主とは何か。組合等が漁獲量等を制限しているということなのか。

**滝田**：そうです。

**長谷部**：なぜ組合等が自主的に管理できるのかということをも明らかにしたいのか。

**滝田**：そうです。

**長谷部**：見通しは怎么样了のか。今回取り上げた 3 箇所は自主的に管理ができているとみなして良いのか。

**滝田**：そう考えています。

**長谷部**：iPad の利用に関して、漁協で購入して配布したものなのか、どこからか提供されたものなのか。

**滝田**：個人が購入したものです。

**長谷部**：漁協がしっかりとしていれば、資源管理もうまくいくということなのか。コモンズの悲劇のような事態を防ぐことが目的だと思うが、他人の漁獲量を把握する仕組み等はあるのか。各個人がうまく漁獲量をコントロールしているかのように聞こえるが、そのようにうまくいくのだろうか。

**滝田**：漁協が中心となっているが、漁業者の意識が高いことが要因となっていると考える。

**長谷部**：漁業者への聞き取り等はしたのか。

**滝田**：していません。

**井坂**：漁業者が資源管理をする理由は、規定で決められているからなのか。所得の増加がインセンティブとなり、合意形成につながっているのか。

**滝田**：そう考えています。

**志賀**：日本では資源の枯渇には至らなかったにもかかわらず、資源管理が行われているようだが、どのような理由で資源管理が行われたのか。資源管理を行うことによる利益があるのだとは思いますが、具体的な契機のようなことはあるのか。

**滝田**：漁業者の意識の高まりや関係者の視察等が契機となっているようです。